

# 法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(58)

見渡せば  
春日の野辺に  
霞たる  
咲き乱れるは  
桜花かも  
(「家持集」)

(見渡してみると、春日の野辺に春霞が立っている。辺りに咲き乱れている花は、桜花だろうか)

皆さんはこの春、どのような桜の風景を心に残されたでしょうか。穏やかな光に咲き誇る姿や、月光に照らされた夜桜、朝日に輝く霞桜や、赤く染め上げられた夕桜など、思い出すたびに、その時の桜色が心象風景として蘇ります。

この歌にある「咲き乱れる」という言葉は、「辺り一面に花が咲く」という意味です。たくさんの草花が咲き揃う姿を前にして、盛んな春の息吹に包

まれたのでしよう。ところで、似た歌が採られている「万葉集」を見

見渡せば  
春日の野辺に  
霞立ち  
咲き匂へるは  
桜花かも

とあり、「乱れる」が「匂へる(色鮮やか)に変わっています。もしかすると「乱れる」という言葉の響きに、目の前の景物だけではなく、「思い乱れる」という好ましくない心情の揺れ動きを感じ取ったのかもかもしれません。心が落ち着かないときには、どんなに自然を肌で感じて、そこには心の距離が生じてしまっています。

「文字の乱れは、心の乱れ」という言い回しがあります。「心の乱れ」は目で見る事ができません

が、態度や言葉(話し言葉・書き言葉)となって表面に現れます。鎌倉時代の歌論書に、

詞はそれ  
心の使ひなるが故に、  
詞球かなれば  
心も球かに聞ゆ。

(「野守鏡」)  
言葉遣いがいい加減だと、心も緩んでいるように見える。

と記されていることから、も、古くからの言い伝えなのでしよう。

正しい言葉遣いを心がけることを、仏教では「正語」と言います。以前「高尾山報」で取り上げた十種類の善い行い(十善戒)の中に、言葉に関わる教えがありました。不安語(嘘を言わない)、不綺語(無駄話をしない)、不悪口(人を罵らない)、不両舌(二枚舌を使わない)の四つです。日頃からこの教えを守り、何気ない言い回しを意識しながら生活することが求められています。



春の息吹に包まれ桜が咲く  
(撮影・高岡輝幸氏)

とは言え、先ほどの「言葉は心の使い」(心に思っていることは、自ずから言葉にあらわれる)という格言からすれば、内面も磨く必要があるでしょう。誰も見ていないと、つい口はしつかりとご覧になっているようです。

昔、土佐国(現在の高知県)に胤間寺という山寺がありました。ある時、その寺の僧に地元の人々が話をもちかけました。「私には『大般若経』を書写しようという大願がある。あなたは手助けをして、結縁(縁を結ぶ)ことするが良い。費用は私が工面

しよう。あなたは仲間にして、さっそく書写に取りかかりなさい」と。その後、役人は約束したにもかかわらず、費用を用意する素振りを見せませんでした。そのまま月日が過ぎ去りましたが、僧は善縁(良い縁)を嬉しく感じて、自分を励ましながら、ようやく書写の事業を成し遂げます。

そこで僧は、例の役人に「大般若経」を書写し終わりました。費用は後々いただきました。費用は多くおきます。まずは供養の法要を営みたいと思ひます」と伝えると、願

## 折り折りの記 (92)

### 高尾なる山裾小屋に花の舞い

波多野 重雄

四月は花見月。谷崎純一郎の『細雪』の三姉妹が京都へお花見に行く小説は有名である。高尾山も花の季節は全山花に覆われ馨しい。出店が賑う中、山裾の花の小屋掛けに舞妓が踊る。ケール客は夕暮れの風に花衣を纏う。

この度、大山御貫首は句集『寝言の前に』を星野高士先生の懇篤なる序文のもと上梓された。謹んで拝読した。「句碑ありて花ありて人縁深し」の余情に畏敬の念新た。

(高尾山健康登山の会長)

## 登有喜苑 (三)

四月八日仏誕嘉

大白仏搭喜堂花

塔内祭祀両懸仏

先祖供養請釈迦

厚木市 荒井 一雄  
いくたびぞ  
この坂道を登りける  
やすらぎ真ひ坂を下りける

### 有喜苑に登る (三)

四月八日の仏誕節、そ、

まことに喜たけれ、

巨大なる白亜の仏塔

(真正仏舍利の奉安されしパブツは、

堂花(花御堂)を喜びて承けたり、

塔内(祭祀)されたる両つ懸仏

(我が方母方の赤々先祖代々之精進、

先祖の供養こそ、

お釈迦様へ願へれ、

主の役人は喜んで、さうそく供養を執り行いました。ところがその時、突然につむじ風が起つて、お経を全て虚空へと巻き上げてしまいました。聴聞にやつて来た人々も不思議に思っていたところ、しばらく経つてからお経は白紙となつてハラハラと落ちてきたのでした。

ただ、よく見ると大きな文字で、四句の偈(経文)だけが紙にはつきりと現れました。その文句には、このように書かれていました。

願主の檀那は不信ゆえ、  
料紙は本土に還る。  
経師は信有るゆえ、  
文字は靈山に留まる。  
(役人には信仰心がないから、紙はそちらに返す。僧には信仰心があるから、文字は仏のもとに留まる)

(十訓抄)  
僧や仲間、ひたむきに一字一句を書写し続けました。時にはお経を唱えながら、手を合わせる日もあったでしょう。対

## 東日本大震災 七回忌法要厳修



有喜苑における法要

東日本大震災から本年で六年を迎え、高尾山では三月十一日に、大震災による物故者の御冥福をお祈りする「東日本大震災七回忌法要」が営まれました。

当日は大本堂内慈照観音前及び、有喜苑に建立された東日本大震災物故者供養塔に於いて、参列の皆様と共に被災者の鎮魂と、被災地早期復興を祈る一時となりました。

(栃木北部教区普濟寺)